

「内鮮一体」という練成

——小尾十三「登攀」——

田 村 栄 章

要 旨

小尾十三の小説「登攀」は主人公の教師である北原が、特に目を掛けていた朝鮮人の教え子である安原壽善を立派な皇国臣民として導こうとする過程が描かれている。その内容が時局的基準からが選考基準で最も重要視されていた1944年8月第19回芥川賞を受賞した大きな理由であった。しかし、それはあくまでも安原壽善を立派な皇国臣民として導こうとする過程が描かれているだけであって、彼が日本人として立派な皇国臣民となったか北原の導きが結果として成功したのかといえ、そうとは言えない。むしろ朝鮮人青年の皇国臣民化とその先の内鮮一体化への困難を記した作品であると読めてしまうのである。内鮮一体という言葉に込められた論理を当時の状況から分析をした。

キーワード：内鮮一体・皇国臣民・外地

1

1944年8月、当時の朝鮮半島で発行されてきた『国民文学』¹誌が、創刊以来最も注目を浴びる出来事が訪れる。それは同年2月に同誌に掲載された、小尾十三の小説「登攀」が、八木義徳の「劉廣福（リュウカンフー）」とともに第19回芥川賞（1944年上半期）を受賞したことであった。「登攀」は主人公である教師である北原邦夫が、「内鮮一体」の考えのもと、特に目を掛けていた朝鮮人の教え子の安原壽善を立派な皇国臣民として導こうとする過程が描かれている。この「登攀」は小尾十三のデビュー作であり、彼はこの時満州国の首都であった新京（現：吉林省長春市）で社会人生活をしていて全く無名の存在であった。²『国民文学』にしてみれば、当時日本語で発行されていた雑誌は常に執筆者不足に悩まされており、そうした中で芥川賞を受賞作家が出たことは、『国民文学』の主幹であった崔載瑞の言を俟たずとも、まさに「近來の快事」³であった。⁴しかし、このように『国民文学』誌にとって雑誌から芥川賞受賞作を出したことは「近來の快事」であるが、中央文壇の一大商業雑誌である『文藝春秋』が、当時の言説で言うところの「外地」の日本語雑誌に注目し、異例とも思える芥川賞という最高に権威ある文学賞を与えた

ことは、戦中期のこの時、実は異例のことではなかった。芥川賞受賞作を見ても、第13回（1941年上半期）の受賞作、多田裕計「長江デルタ」の掲載誌は、上海で発行されていた『大陸往來』（第2巻第3号 大陸往來社）、第17回（1943年上半期）の受賞作、石塚喜久三「纏足の頃」の掲載誌は当時、内モンゴルの張家口で発行されていた『蒙疆文學』（第2巻第1号 蒙疆文藝懇話會 1943年1月）であった。またこの石塚喜久三が受賞した1943年上半期では、上海で発行されていた『上海文學』（上海文學研究會）掲載の小泉譲「桑園地帯」（巻号表記なし 1943年4月）が候補作品に、同じく『上海文學』掲載の黒木清次の「棉花記」（1943年10月）が第18回（1943年下半期）の候補作品、「続棉花記」（1944年3月）が第19回（1944年上半期）の予選候補と、『上海文學』から3作品も選ばれている。このように芥川賞の選考基準はこの時期、すでにその文学性の高さ以上に時局的にふさわしいかが一番に置かれたのである。⁵ それを表すのが石塚喜久三の「纏足の頃」を評した川端康成と片岡鐵兵の言葉に表われている。

「石塚喜久三氏の「纏足の頃」は、前に「蒙疆文學」で読んだ時、とにかく内地に紹介したい作品だと考えた。しかし、この作品が芥川賞の問題になるとは予想出来なかった。著しく未成品だからである。ところが結局この作品を推す外なかったのは、今回の候補諸作の貧困のせいである。（中略）技量は従来の芥川賞の作家に未だ及ばぬのである。蒙疆の文学運動が始めて内地に紹介されるという意味の喜びも感じる。」（川端康成）⁶

「「纏足の頃」は芸術作品としての表現が熟していない。実話雑誌的な文体で感動を型にはめた点が気になり、私としては推しかねたが、しかしこの授賞が在蒙疆の諸氏の文学活動を世に紹介する機縁ともなれば、それはそれで非常にうれしいことだと、今は思い返している。」（片岡鐵兵）⁷

まずこの石塚喜久三の「纏足の頃」が掲載された『蒙疆文學』を同人誌とする蒙疆文藝懇話會自体が、「翼賛ノ本旨ヲ体シ吾ガ蒙疆文化精神ノ昂揚ト東亜民族ノ協力一致ノ樹立ヲ目的」に創立された。さらに蒙古政府弘報局が後援する「蒙疆文学賞」の第一回入選作となった。「蒙疆文学賞」の選考委員でもあったのが、芥川賞の選考委員の川端康成と横光利一であった。⁸ それはまさに時局的考慮そのものであったといえよう。こうした中で時局的考慮による「外地」文学最大の隆盛期が「登攀」と「劉廣福（リュウカンフー）」の2作が受賞したこの時の第19回の芥川賞であったのである。

では、芥川賞の選考委員たちは「外地」の中央では無名ともいえる雑誌に掲載された「登攀」のどのような点を評価したのであろうか。片岡鐵兵は、「人間のこの時代に生きる精神を掴もうとする点」⁹ を評価し、また横光利一は、「百五十枚の長さにしては誠実な大問題がひしめき、暗怪に衝突し合う息苦しきの魅力、度を過ぎて襲来する作品である」¹⁰ と評価する意見もあるが、しかし、「部分的にはむらの多い出来栄である」、「作の遠近法などめっちゃめっちゃで未だいいところが多すぎ

る」¹¹（佐藤春夫）、「今遽に推薦するのは多少躊躇される」¹²（川端康成）、「短篇としての冴えと匂いが稍劣らと思った」¹³（瀧井孝作）、など、その技術面に関しては、厳しい評価を受けている。このように必ずしも手放しで受賞されたとは思えない「登攀」であった。が、しかし、ではなぜ推薦候補 13 篇の中から第 1 次予選候補 8 篇に残り、そして候補作 4 篇の中から中国を背景にした作品である八木義徳の「劉廣福（リュウカンフー）」とともに芥川賞受賞にまで至ったのであろうか。¹⁴そこには「登攀」がいかに読まれたのかが大きく関係していると言える。芥川賞受賞作品として『文藝春秋』に掲載された「登攀」について、その「編集後記」では次のような評価をしている。

内鮮一体の問題を真正面から凝視して、これを丸彫りにしてゆく作者の鑿はあくまで勁い。半島同胞の問題はある意味で満支の民族問題に繋がり、ひいては大東亜の各民族に全面的に広がるべき深き根底を持つものである。日本人自身にあくまでも廣い包容力と正しい愛情が強く要望されてゐる今日、かうした作品の意義は大きいと思ふ。¹⁵

このように「編集後記」で評価しているのは、その扱っている題材であり、作品に見られる「内鮮一体の問題を真正面から凝視して」いることを評価しているのである。1944 年という日中戦争が開戦されてから 7 年、「大東亜戦争」も開戦から 2 年半以上が経ったこの頃、芥川賞の選考基準もすでに時局的基準から第一に選ばれていた。「登攀」と同時受賞をした、八木義徳の「劉廣福（リュウカンフー）」もまた、大学卒業後、旧満州の奉天（現在の瀋陽市）にある満州理化学工業に勤務をしていた時に知り合った、現地の実在の中国人工員の姿を描いた小説である。その内容もまた、「工人招募」の貼紙に応募してきた吃音で童顔の大男、劉廣福が周囲から愚弄されながらもその働きぶりですぐに認められていく。だが、無実にもかかわらず工場で発生した窃盗事件では容疑者として警察に勾留されてしまうなどの困難にも遭うが、工場のガス爆発の際には、単身消火活動にあたり、絶大な信頼を勝ちとっていくという物語である。¹⁶それは満州政策において、当時盛んに宣伝された「日満協和」・「五族協和」というスローガンを作品化したものといえよう。このことは「内鮮一体の問題を真正面から凝視して」いること、そしてそれは上記の「半島同胞の問題はある意味で満支の民族問題に繋がり、ひいては大東亜の各民族に全面的に広がるべき深き根底を持つもの」という評価を受けた「登攀」が掲載された『文藝春秋』の「編集後記」での評価ともまさに符合している。それは芥川賞の選評で、「芸術的に不備な点が相当目立つに拘らず、矢張推したい気持を抱かせた」と述べている河上徹太郎の言葉が、また「この二篇は正しく今日書かれなければならぬ作品を作者がこれ程熱を持って書いたのがまず珍重である」¹⁷と述べている佐藤春夫の言葉がそれを象徴している。それは「登攀」においては、朝鮮人の朝鮮式の姓を日本風に変えることを定めた 1940 年実施の「創氏改名」政策から、1942 年の朝鮮人の「徴兵制」の発令（実施は 1944 年度から）といった、朝鮮半島における皇民化政策が苛

烈化していく中での教育界と、教師の奮闘を描いていることにあたると言える。いわゆる「内地人」と「朝鮮人」は平等であり、一つにならなければならないことを謳った「内鮮一体」が盛んに喧伝されたこの当時、「内鮮一体」の現実の矛盾を抱えながら朝鮮人を教育・教化する日本人教師の心理を描いた記録として貴重といえる「登攀」は、その文学性はさておき、いかに朝鮮人の若者を日本人になりたいという欲望に駆り立てて行ったのか、また左翼思想を持っていた寿善が徴兵制の公布に際しては、「滅死の覚悟で奉公できる、感激の機会がやってきた」¹⁸とまで思えるに至ったのか、植民地時代の朝鮮における皇国臣民育成の過程を、ある一学生を通じての教師の記録から分析したい。

2

「登攀」は、新京の日本人中学校で教師をしている北原邦夫のもとに、以前、金剛山近くにある都市の内鮮共学の商業中学校で教えていたときの教え子である朝鮮人学生の安原壽善(安壽善)の葉書が届くことから物語が始まる。物語内現在では、ここから壽善との手紙のやりとりがあり、この間にかつて壽善を教えていた商業中学校時代のことが、回想形式で挿入された形の入れ子構造になっている。作品の中心となるのが、この入れ子の中にあたる北原の商業中学校時代における壽善との交流と葛藤を中心に、二人それぞれの家庭問題や挫折、そして様々な皇民化政策との関連を絡めて描いた部分にある。その中でも作品の最も中心となるのが北原が壽善を誘っての悪天候の中での金剛山の登頂であろう。いわば作品のクライマックス箇所ゆえの「登攀」という作品名であるが、作品内でこの「登攀」という言葉が意味するものはこれだけではない。¹⁹

まず主人公北原についてだが、北原は大学時代に関わった左翼運動のために大学を退学させられたことが原因で、「それが何時までも身許調査につきまとい、転々と放浪を重ねなければならなかった」²⁰ため、「放浪の十年間」の末、32歳にしてようやく、壽善と過ごした内鮮共学の商業中学校の教諭の職を得る。おそらく北原が遠く朝鮮半島の金剛山近くに教師として赴任したのもこうした事情が大きく関係してのことであろうことは想像に難くない。また、商業中学校を退職し、新京に行くことになったのも彼の離婚が原因である。このように北原の人生は、移動し、そしてそこには常に挫折がつきまといっていることは注目すべきである。

このような北原を信奉する壽善もまた、移動による挫折の経験者であった。壽善の場合、早くに父親を亡くしており、伯父の家に母と妹と3人で寄食している。壽善はこの伯父の援助で学校に通っていたが、「母はその代り小作人同様にこき使はれねばならなかった」ため、母は壽善と妹を連れて「伯父の許しも得ず家を飛出し」、「鉦山町に鉦夫相手の酒家スリヂビをひらく。しかしそうした一連の行動は、「独りでそんな知恵の生れる母ではなく」、「伯父の家の小作人権平澤」が「母に入知恵した」からであることを壽善は知る。「開店早々権はやつてきて我家顔に振舞った上、

その後も夜遅く迄飲む」権平澤を壽善は憎く思う。「性来の吝嗇と頑迷」²¹さを持つ伯父ではあるが、慕っていた従兄である一善のいる伯父の家での生活を、壽善は母と権の二人に奪われた気持を強く持つことになる。また、母はやがて再び今度は壽善を置いて権平澤と逃亡をはかるなど、一人放浪し、結婚生活も長くは続かず、また一人誰も知り合いもない新京へと新天地を求めて移動した北原と同じく、移動による苦い経験のみならず、孤独という点でも二人は大きな共通項を持っているといえる。

北原にとって、この「転々と放浪を重ねなければならなかつた」10年間は、彼の人生に大きな影を落としたと言える出来事であった。そうした末に「官吏である公立中学校の教師と」なったことには、「日本国民としての自覚」を「彼なりにその自覚を取り戻したから」²²であり、だからこそ、「朝鮮人生徒間に思想的団体が発覚し」たことを契機に、訓育主任が校長の許可の元、壽善の家を家宅搜索をした際、実際に左翼関係の思想書が壽善の家から『証拠物件』として押えられたと聞いた時、「机から動け」ず、「自分の十年放浪の暗い日々が、今日の日からいたけない少年壽善の前に展開するやうに怖れられた」のである。と、同時にそれは壽善を「立派な皇国臣民」への道に導ぼうと特に目をかけてきた自身の努力が無駄となったことを意味していた。北原にとってこの「自分の十年放浪の暗い日々」を自分の教え子にさせてはならないという思いから、「朝鮮人として内鮮一体に対する思想一心構えの問題」を「朝鮮に来て教職に就き内鮮の生徒を担当してみて、始めてその重大性に気付」き、「立派な皇国臣民を作り上げ」るには、「自分が日本人の典型たらんとして生活をする事こそ」²³が大事であるという考えに至るのである。「十年放浪」の末、「官吏である公立中学校の教師」となって一つの地に根を張ることができた北原にとって、「教育者は実に国家の教育の目的を明瞭に体認して、それを具現しゆく所に其の本質的使命があり、「国家の代行者としての教育者である」²⁴という意識を持つに至ったのである。それはまた、壽善に対しては、서영인(ソ・ヨンイン)が述べているように、「北原の左翼経歴は小説で北原の意識で重要な部分を構成するが、それは自分の左翼経歴を暗い過去、一つの罪として認識し、そこから抜け出すために生徒指導にさらに力を注ぐ。壽善を皇国臣民の道に導くのは、自分の罪から抜け出し新たな存在に生まれ変わることであ」²⁵ったのである。

3

こうした二人が最も心を通わす契機となったのが、登山が趣味の北原が壽善を誘っての金剛山への登攀においてであった。この北原の登山の趣味は、困難の時期であった左翼経歴による「放浪十年の間に、何時知らず」覚えたものであり、「山登りの真実の愉しみは」、もともと「出来ることなら独りに限る」と信じているものであった。北原の登山は、独り自己と対峙しながらであったが、壽善を誘っての登山となったのはこの頃、妻の不貞により離婚が現実のものになろうとい

う困難の時期であり、「人知れず暗い日々を送つてゐた」「独りになることが虚しく思はれる」時であったためである。彼にとって登山という上への“移動”は「岩登りの度に、戦ふ相手は自然でも山でもない事を、その都度思ひ知る」ため、また「何かもつと重大な頂上を越さねばならぬ時」、「山に依つてその力を試さうとする」、つまり自己との対峙と、自己の力を信じることで、下界での困難を乗り越えるための力を得るための意味をもつものであった。つまり、北原の登山趣味は、左翼経歴による「放浪十年」という時間は、進むべき道を見出せず、自己を見失っていた時間ととらえていることに対して、教育者となって立派な皇国臣民を育て、彼らを導く明確な進むべき道を見出したことの象徴となっているのである。困難の時期という意味ではこの頃の壽善も同様であった。壽善もまた、中学校の教育費を出してくれている伯父と、そのために伯父の家で「小作人同様にこきを使はれ」て、愛人と暮すために家を出ていきたいため、学業をあきらめると壽善に迫る自分の母との間で苦しむ。彼らは北原にしてみれば、「息子の為に死の道を探りこそすれ、自分の満足だけ主張して息子を悩ます母を想像することは出来ない。又徹底した金銭づくでその甥を教育しようといふ伯父の世界も想像離れがしてゐる」と思わせるほどであった。そんな中で自分の気持ちを押し殺しながら、人の裏ばかりを見てしまう生活をしてきた壽善は、『もつと正直に、自分の心を偽らず』『もっと純粹に生きたい』²⁶と北原に訴えている。壽善を誘つた北原に、『行きます!』と「即座に、はずむやうな響きで」答えたのも、壽善はまだ知らない同じく家庭の事情を抱えている北原にとってみれば、また一つ、二人の心を通わすことになる出来事であった。そしてまた事実、壽善も金剛山の登攀で、自身の思いを次のように吐露する。

『僕は今まで、自分の不道徳や怠惰を、みんな環境のせいにしてゐたのです。然しやらうと思へば、何でもやれるものだ今日は痛感したのです。絶望しても闘つてあれば、その最後には必ず何らかの光に到達出来るものだと思ひ知りました。はつきり今はどうだと云へないのです。然し今日は何年分の修身の時間よりも確に感じられる手応えがあつたやうに思ふのです』²⁷

壽善はこれまで進むべき道を見失っていた自分も導き入れ、連れていってくれるかもしれないという人間にひかれ、彼らを想い、そして時には協力を惜しまなかつた生活をしてきた。だがしかし彼が6年生の時、母は愛人と家を出て行き、その母を想い、「夜毎机に伏しては独り嘔び泣くのが慣し」であつたし、「ヴァイオリンを買つて貰ひ」「近くの清流の畔に壽善を連れ出し、嘗つて一度も味つた事のない気高い世界に」「誘つて行」つてくれた従兄の一善も「東京の音楽学校にパスすると、金持の漁業家の娘と結婚して東京に行つてしま」つた。また彼に関しては、その後、「他の女と恋愛関係が生じ」ハルピンに行った彼の要望で金策もしている。このように、それぞれが挫折をしながらも少なくとも自らの意志で行動した人間を慕い続け、自分も導いてく

れることを望んでいる壽善にとって、北原もまた、この金剛山の登攀を通じて自分を導き、新たに自分が進むべき道を教えてくれる人間であることを感じ取ったに違いない。北原はこうした壽善に、この登攀を通じて、壽善自身もまた自らの意志で“移動する”ことの意義を教えたのである。

4

その後、壽善は「北原も壽善もその合格には自信があつた」「城大予科（引用者註：京城帝国大学予科）を受験する」ことを決める。つまりそれは、自らの意志で“移動する”第一歩となるはずであった。しかし、その新しい道への第一歩は壽善の母によってもろくも潰えてしまう。それは京城に出発する前日の夜のことであった。普段、伯父に虐げられていた母は、それまでも「お前さえ生意気に中学へなど行かず奉公にでも出てくれたら、私は権平澤と呑気に暮せるのだ」²⁸とか、「お前は自分の都合ばかり考へて、この母親や赤子を見殺しにする心算かとまで迫られて」おり、またさらに権が来たことを知ると、「頑強に出る事を主張し」「狂はんばかりに泣き叫び訴へる」²⁹。こうして京城という朝鮮半島最大の都市へ、そして自分の夢へ自らの意志による登攀はあえなく失敗してしまう。

そのような失意の壽善を残し、離婚が決まった北原は、妻が働いていた女学校の校長より北原の勤務校の校長宛てに「教育上面白くないから」との理由で「北原の転任をも懇請してきた」³⁰ことにより、新京の日本人中学校へと移る。そこへ来たのが彼が友人宛てに出した手紙が疑われて、家宅捜索を受けたという手紙であった。これを読んで「壽善は今日の日になつても未ださういつた彷徨を続けてゐるとは、又どうしても信じられない」³¹気持ちとなるのである。だがこの時、壽善にとって次に目指すべき登攀の道は決まっていた。それは彼が「私の熱願」という「完全な日本人になる事」であった。しかし、壽善にとってそれはどのようにすれば「完全な日本人になる」といえるのか実はわかっていなかった。この時の「迷つてゐる」という壽善の言葉には大きな超えるべき問題が残っていた。それが「完全な日本人になる事」という言葉の中にある日本人と朝鮮人という人種の壁であった。つまり、この壁が壽善の前に立ちはだかり、彼が越えられないかもしれないその壁を意識した時、「完全な日本人になる」という次の明確な目標とその登攀への迷いが「彷徨を続け」ざるを得ない状況を作っているのである。「迷つてゐるかも知れない」と言っている壽善が3年生の「夏休みの終り頃の或日」、海水浴に行った北原は、声をかけてきた壽善と創氏改名の話となり、流れから『朝鮮人だつて立派な日本人じゃないか』という北原に対して、次のような話をする。

『そんな事は云ひなくても解つてゐます。全体としてです。内地人朝鮮人としてです、どつちが日本人として立派かといふ事です』

さう追及されては、瞭な返答の用意もその壽善を前に流石口には出せなかつた。

『すみません。解り切つてゐる事を……』

(中略)

『(前略) 現実つてものはみんな何処か欠けている、欠けてゐるからこそ僕らは努力する。努力は辛いこともあるが、それが生きてゐることの面白さだ。お前が若し、本当に朝鮮人の欠けてゐる事を認めてゐるならその修正を計ることこそお前の義務であり、お前がそいつを自覚したら自分の生きてゐることが実に意義あることだと、勉強だつて何だつて猛烈張り合が出来てくると思ふんだ。(以下略)』³²

壽善の質問に対し、北原の答えは明らかに返答に窮しており、「内鮮一体」という言葉に象徴されるように、努力や協力、精進をすれば日本人と同等になれるという期待を抱かせ、立派な日本人になるという見えないその到達点へ更なる努力を強いる。北原の言葉は、朝鮮総督府をはじめとした体制側からすれば、いわば模範解答とでも言つていいものとなっている。壽善の彷徨は「完全な日本人になる事」へのわからなさから来ていると言つてよいのだ。それは例えば、壽善の伯父が元の名字である「安」から「安原」に創氏をしたが、自身の名の改名は悩みながらも、もとの名の壽善の読みを「スソン」から「ひさよし」と読ませることにしただけで、彼自身は改名をしていない。つまり、壽善にとって、日本人になるためへの登攀への道がわからなかったことにより、結局はそのまゝの生活を続けるしかなかつたのである。改名をしなかつた名前はそれを象徴するしるしであつた。

そんな壽善にとっての自身の行き場となる大きな目標が見つかる。それが「朝鮮徴兵令の発布」であつた。³³ 壽善は新京の北原のもとに「大ニウス」として、「とうとう、今こそ私達の前にも、滅死の覚悟で奉公できる、感激の機会がやつてきた」と、「いくら叫んでも叫び足りない感激」を味わつたという手紙を寄越す。つまり、内鮮一体という言葉にある日本人も朝鮮人も隔てのない平等のためには、これまで日本人と同様には許されていなかった徴兵制が決まつたことで、全朝鮮人にとって真の平等への道が開けたといえるのだ。また壽善は上級学校への進学の間では、「様々に考へあぐねた結果」、「月謝も不要で、別に給費の制度もあ」る北原のいる新京の新京医大を受験することも決める。このように自分の意志で歩む道を見つけた壽善の手紙に北原は「熱い感激を以つて読了し」、「真偽を確かめるやうな気持で、も一度読み返してみるのさ」³⁴ する。北原はこの手紙の返信として、「お前が若し、未だ彷徨してゐるといふなら、須らく慙死せよ。誤てりと真に悔悟したのであるなら、この機会をこそ、天が与へた大禊とし、正しく男らしく甘受せよ」と書く。さらに彼は自身の人生をも絡めて次のように書き続ける。

書きながら隣機の友人に背を向けて、彼は瞳を潤ませてゐた。彼はそれを壽善にのみ云つ

てゐるのではなかつた。自分自身に諭しきかせてもゐるのであつた。(中略)北原自身、漸くまともな道に辿り着き得たのも、十年放浪に彼を追ひやつた、冷めたい何物かではなかつたらうか。国家機構が、強力に保有するその鞭こそ、或る場合、救ひがたく深入りした迷路から、人を救ひ出し得るのだ。そして壽善に対し、彼はその鞭を一度も加へる事が出来なかつた。それも必要と思ひつつ彼の性格の弱さが、それを果し得なかつたのだ[。]さう思ふと、今回の処置は、北原も壽善と共に、心からの感謝を捧げねばならぬと思つた。³⁵

北原の場合、「十年放浪に彼を追ひやつた」のも、不穩分子として監視下においてきた国家機構であり、また北原を官吏にし、「国家の代行者としての教育者」として責任ある地位に就かせ、自覚をさせたのも国家機構であつた。そして今、自分の進むべき方向、そして移動が出来ずに苦しんできた壽善を、また「完全な日本人になる事」とは何かということを見いだせなかつた壽善を、徴兵制という国家機構の決定により、日本人とやうに同等な義務を与えることで、「救ひがたく深入りした迷路から」彼を「救ひ出し得」たと思つたのである。この事に北原が「壽善と共に、心からの感謝を捧げねばならぬと思つた」のは言うまでもなく、教え子である壽善が自らの意志で登攀する山を与えてくれたことと、そしてもう一つ、日本人と同等な義務が朝鮮人にも与えられたことで、壽善に対して堂々と「内地人朝鮮人」「どちらが日本人として立派か」という質問にも答えられることができるようになったということに対してでもあると言えるのである。

「登攀」が掲載された『国民文学』誌において編集兼発行人である崔載瑞は、「修練の機会に恵まれなかつた」にもかかわらず、それまであつた「半島人は国民たるの資質に於いて根本的に欠けてゐるのではあるまいかと云ふ懸念」を一掃する機会を与えられたことで、この「徴兵制の実施を契機として半島人の地位が飛躍的に向上せしめられるであらうことは明瞭である」³⁶と述べている。だがこれは総督府や日本人が掲げた同化のための口実であつた。

結論

先に引用をした『文藝春秋』に掲載された「編集後記」での言葉を使うと、「登攀」が芥川賞を受賞した理由はこのように言えるであろう。「内鮮一体の問題を真正面から凝視して」「半島同胞の問題」をとりあげて、「日本人自身にあくまでも廣い包容力と正しい愛情が強く要望されてゐる今日」、左翼思想から転向を経験した教師北原が、「国家の代行者としての教育者」として、自らにも言い聞かせながら、一度は道を誤りかけた朝鮮人生徒である壽善の心を開き、彼が数々の困難を乗り越えて、立派な皇国臣民として育っていく姿を描いた作品であると。作品性以上に時局を優先し、時局にふさわしい作品としてこの作品が芥川賞に選ばれたことを考慮すると、おおよそそのような解釈が妥当であろう。ここで強調すべきことは北原の導きにより、壽善が立派

な皇国臣民として育っていく姿が描かれているという点であって、立派な日本人を目指している点ではないということだ。朝鮮半島の人間にとって立派な皇国臣民になることは、立派な日本人として認められることにつながるものであった。「内地人朝鮮人」「どちらが日本人として立派か」と壽善に「追及されて」、北原は瞭かな「返答の用意もその壽善を前に流石口には出せ」なかった事実、ここに朝鮮半島の現実がある。

この頃、朝鮮近代文学の父と呼ばれながらも、「親日」行為によって以後、糾弾の対象となってしまう李光洙は、「内鮮一体随想録」という「内地」在住の朝鮮人学生向けに書いた随筆の書き出しで次のように述べている。

内鮮一体とは朝鮮人の皇民化をいうのであって双方歩み寄ることを意味するのではない。朝鮮人の方でどんなことがあっても天皇の臣民になろう日本人になろうと押掛けて行く気迫によってこそ内鮮一体はなるのである。だから内鮮一体の鍵は朝鮮人自身が持っていることとなる。朝鮮人の識者階級でよく「本当に内鮮一体にしてくれるのかな」と如何にも不安そうに喋っている声を聞く。

眞に内鮮一体となれば、内地人の朝鮮人に対する特権が消失するから、内地人は、朝鮮人が本当に日本人になるということを嫌うだろう、という心である。これは一見馬鹿馬鹿しい杞憂のようではあるが、実際は相当に根深い杞憂である。また意外にも内地人の中で、そんなことをいっているものもある。³⁷

ここで李光洙は明らかに「内鮮一体」とはなにか、そして植民地政策の特性と論理の実際について気づいていたといえる。しかしここでの正論はあくまでも「他者」の話として否定し、「内鮮一体にしてくれるとかくれぬとかそんな心配は一切無用だ。問題は朝鮮人自身のや努力にある」とし「発奮して国語（引用者注：日本語）を学び日本精神を学び日本の礼儀作法を学」ぶ必要性を訴えている。1939年10月に朝鮮文人協会が結成されその初代会長に就任し、現役文学者の大同団結と、国民精神総動員朝鮮連盟の加入、および非常時局下の文学報国などを掲げて、文学者の戦争協力の先頭になつて活動した李光洙は、1943年4月に朝鮮文人報国会に再編される以前に、すでに内鮮一体をはじめとした、植民地統治政策の実状に気づいていたのだ。

壽善が立派な日本人になることを願いながらも、一方で左翼思想書を持ち、左翼思想から抜け出していないかに思える行動をとっているのも、李光洙が気づいていた内鮮一体の論理に壽善自身も気づいていたからと言えるであろう。壽善の側に立って作品を解釈した場合、そこから浮かび上がるのは、むしろ内鮮一体という練成の困難さである。

教育者としての北原は、朝鮮人である壽善に熱く立派な皇国臣民となることを説くが、それはいうなれば、内地を離れ、朝鮮の地で教師として再出発をした彼自身の贖罪であり、自らの転向

者としての過去の汚点を拭い去れることでもあった。「国家の代行者としての教育者」として、北原自身が教育者としての矜持を持てるまでには、更なる時間と困難がかかることは、この「登攀」という作品における、壽善一人の練成を見ただけでもそれはうかがえるのである。

注

- 1 『国民文学』は朝鮮文壇最大の朝鮮語文芸誌だった『人文評論』（編集兼発行人：崔載瑞。1939年10月～1941年4月）、および『文章』（編集兼発行人：李泰俊。1939年2月～1941年2月）の二誌が強制的に廃刊させられ、この二誌の統合の結果生まれた。『国民文学』は1941年11月に『人文評論』の編輯兼発行人であった崔載瑞によって人文社より刊行され、1945年5月まで続いた月刊文芸雑誌である。そのうち1941年12月号と1942年9月号は休刊で、1942年5月・6月号は合併号、1945年4月号は発行されたかどうか不明である。『国民文学』の創刊当時、1月・4月・7月・10月の年4回が日本語版、残りの年8回は朝鮮語版の予定で創刊。（だが、朝鮮語版は原稿不足に一度も発行されなかった）それは朝鮮半島で唯一の、そして結果的に植民地期最後の文芸雑誌であった。（参照、大村益夫「『国民文学』解題」人文社編 復刻版『国民文学』別冊 緑蔭書房 1998年4月5～6頁）
- 2 小尾十三 [1909～1979] 山梨県北巨摩郡穂足村（現・北社市）生まれ。甲府商業学校中退。その後は「長野鉄道局教習所電信科へ入所。以後、鉄道勤め其他の職を転々。共産党影響下の全農支部青年部書記などともなる。左翼退潮と共に組織が崩れ、母が借金してきた金十七円を貰い上京、貿易商社其他転々と奉公」。またこの間、文検（旧制専門学校卒業に相当する検定試験）に合格し、「正則英語学校夜間部に学び、実検商業科の免許状を得」て、中等教員資格を取得。が、「警察の身元調べのため、全国どこの学校にも就職不可能だった」。おそらくこれは過去の左翼運動のためであろう。その後、1934年朝鮮総督府通信局に勤務のため朝鮮に渡る。勤務の傍ら1939年に元山公立商業学校の英語教師として赴任する。この元山公立商業学校で担任だったある朝鮮人学生が「共産党事件」で検挙されたことが「登攀」が生まれる契機となった。「登攀」は小尾十三のデビュー作であった。その後1942年に当時満州国の首都であった新京の新京中央放送局に就職。翌1943年、森永製菓の満州本社創設と共に経理課長に転職。「登攀」は森永製菓在職中に執筆し、『国民文学』（1944年2月）掲載された。終戦による引き上げ後は、元・文芸春秋社員たちの興した日比谷出版社で働き、50年に郷里山梨県で高校教師となる。その後は母校である甲府商業高校の教諭を1965年から69年まで勤める。（参照、『芥川賞全集 第3巻』文藝春秋 1982年4月 440～441頁、宮澤隆義「小尾十三」浅井清・佐藤勝編『日本現代小説大事典』明治書院 2004年7月 1199頁。川口則弘『芥川賞物語』文藝春秋（文春文庫）2017年1月 68頁。引用、小尾十三『新世界（芥川賞作家シリーズ）』学習研究社 1965年6月 381頁。）
- 3 石田耕人（崔載瑞）「今年の新人群」『国民文学』（巻号表記なし、『国民文学』は以下も同）人文社 1944年12月 27頁
- 4 実際、創刊当時240ページを誇った『国民文学』は、1942年10月号の時点で、161ページと激減し、さらに1944年新年号では、創刊当時の約半分の122ページとなってしまっている。『国民文学』では、こうした原稿不足を補うため、毎号のように「新人推薦規定」の広告が出され、小説、戯曲、評論の募集を行なっている。当時、朝鮮半島に在住していたわけでもなく、全く無名の小尾十三がこのデビュー作「登攀」を掲載できたことには、このような執筆不足、原稿不足といった背景があったとみるべきであろう。原稿用紙150枚、ページ数65ページ分となった「登攀」の掲載はまさに崔載瑞にとって

- も渡りに船であったといえよう。
- 5 ちなみに村松定孝は、「戦中（昭16～19）の受賞作八篇のうち、五篇までが日支事変及び太平洋戦争の戦時下にふさわしく満州や中支に取材したり出征軍人をつかったものであった」と述べている。ちなみにこの5作品のうち「満州や中支に取材した」作品は、昭和16年上半期の多田裕計「長江デルタ」、昭和17年下半期の倉光俊夫「連絡員」、昭和18年上半期の石塚喜久三「纏足の頃」、そして昭和19年上半期の八木義徳「劉廣福」。出征軍人をつかったものが、昭和19年下半期の清水基吉「雁立」である。（ちなみに昭和17年上半期は該当作品無し。昭和20年上半期からは中止。復活は昭和24年上半期から。）ここに朝鮮が舞台の「登攀」が加われば8篇中6篇ということになる。（引用、村松定孝『「芥川賞」と商業ジャーナリズム』長谷川泉編『國文學解釈と鑑賞 臨時増刊号』至文堂1977年1月37頁）さらに松本和也は、これらの作家と作品の特徴として、「時局的なモチーフをとりあげた受賞作品は、時局ゆえにそうしたモチーフが選ばれたというばかりではなく、時代が要請したところの作者の実体験（外地勤務等）に即したのもであり、「作者その人の実生活をモチーフとして創作に」「反映するという一点において、きわめて近似した背景／作品設定を共有している」と指摘している。（松本和也「昭和10年代後半の芥川賞：受賞作品の同時代受容分析」『人文学研究所報』61号 神奈川大学人文学研究所2019年3月 33～34頁）
 - 6 「第十七回芥川賞選評」『芥川賞全集 第3巻』文藝春秋1982年4月 386頁
 - 7 「第十七回芥川賞選評」『芥川賞全集 第3巻』文藝春秋1982年4月 387頁
 - 8 参照、鶴飼哲夫『芥川賞の謎を解く－全選評完全読破』文藝春秋〈文春新書〉2015年6月 74頁
 - 9 「第十九回芥川賞選評」『芥川賞全集 第3巻』文藝春秋1982年4月393頁
 - 10 同上395頁。しかし横光は、「登攀」を芥川賞に最初に推挙したという岩倉正治に対して、芥川賞受賞後、「あれには相当問題があつたですよ」と笑ひながらの返事をしたエピソードを岩倉は語っている。（岩倉正治「「登攀」について」『国民文学』人文社 1944年10月32頁）
 - 11 同上393頁
 - 12 同上394頁
 - 13 同上395頁
 - 14 川村湊は、文藝春秋の菊地寛によって制定された芥川賞が、「昭和一〇年代の外地文学」の隆盛に大きく寄与したことを指摘し、中でも終戦直前のこの1944年度の第19回芥川賞の受賞作である、八木義徳の「劉廣福」と小尾十三の「登攀」の同時受賞を注目し紹介している。（川村湊『異郷の昭和文学：「満州」と近代日本』岩波書店〈岩波新書〉1990年10月143～6頁）しかし、この推薦候補13篇も、第14回（1941年下半期）が32篇、15回（1942年上半期）は23篇、16回（1942年下半期）は26篇、17回（1943年上半期）は23篇であったが、18回（1943年下半期）は10篇と、「言論統制や紙不足による統制のため、雑誌の休廃刊や同人誌の統合が進み、発表できる媒体は限られ、また「戦争に駆り出される若者も増え、文学作品が減った」時期であり、第19回の推薦候補13篇の次の第20回（1944年下半期）では、たった推薦候補が7篇となり、この回をもって芥川賞は中断となる。（引用および参照、前掲鶴飼哲夫『芥川賞の謎を解く－全選評完全読破』78～79頁）ちなみに「雑誌の休廃刊」で言えば、既に1944年の7月には文芸誌で当時最も権威のあった雑誌のうち、『改造』および『中央公論』が軍部の勧告により廃刊させられている。
 - 15 「編集後記」『文藝春秋』第22巻第12号 1944年12月
 - 16 参照、掛野剛史「劉廣福」浅井清・佐藤勝編『日本現代小説大事典』明治書院 2004年7月 1110頁

- 17 「第十九回芥川賞選評」『芥川賞全集 第3巻』文藝春秋 1982年4月 393・395頁
- 18 「登攀」134頁
- 19 なおこの頃、『国民文学』に新たに登場し、発表された在朝日本人における教師経験者の作品は「登攀」だけに限らない。例えば、朝鮮文人協会懸賞小説を『連絡船』（『国民文学』1942年4月）で当選した久保田進男は、1940年4月より咸鏡南道永興郡永興公立国民学校長であり、『国民文学』創刊号に発表された「父の足をさげて」（『国民文学』1941年11月）や「その兄」（『国民文学』1944年4月）を書いた宮崎清太郎は、京城所在の私立中学校教師。また「国語にそだてる」（『国民文学』1943年1月）、「山静かなれば」（『国民文学』1943年3月）、「たゝかひ」（『国民文学』1943年10月）、「つはものの賦」（『国民文学』1944年6月）などを発表した飯田彬もこの時、全州師範附属国民学校の現役教師であった。（以上参照、朝鮮文人協会記「選者の感想」『国民文学』人文社 1942年4月 84～85頁。および、가미야 미호 (神谷美穂) 「재조 일본인 작가의 소설에 나타난 ‘일제’ 말기 일본 국민 창출 양상－「국민문학 (国民文学)」에 발표된 현직 교사의 작품을 중심으로－」(日本語訳:「在朝日本人作家の小説に表われた「日帝」末期、日本国民の創出様相－「国民文学」に発表された現職教師の作品を中心に－) 『日本文化研究』第39集 동아시아일본학회 (東アジア日本学会) 2011年7月 8頁。
- 20 引用、小尾十三「登攀」『国民文学』1944年2月 80頁。なお「登攀」は同年12月に刊行された『新半島文学選集第2輯』（石田耕造編 人文社）にも収録されたが、ここでは早くも初出から改稿されている。また戦後、芥川賞作家シリーズとして刊行された『新世界』（学習研究社 1965年6月）では内容がさらに大幅に改稿されていることから、引用は初出をもととする。なお、この「登攀」の改稿過程を分析した論として、任展慧「芥川賞受賞作『登攀』の改削について」『(季刊) 三千里』1975年春号 三千里社 1975年2月）がある
- 21 「登攀」93～94頁
- 22 「登攀」80頁
- 23 「登攀」99、104～105頁
- 24 朝鮮初等教育研究会『皇国臣民教育の原理と実践』朝鮮公民教育会 1938年9月 61頁
- 25 서영인 (ソ・ヨンイン) 「일제 말기 일본의 국책 문단과 외지의 문학－오비 쥬조의「등반 (登攀)」을 중심으로 (「日帝末期、日本の国策文壇と外地の文学－小尾十三の「登攀」を中心として)』 『現代文學理論研究』Vol.47 현대문학이론학회 (現代文學理論学会) 2011年12月 241頁。(原文韓国語、論者自訳)
- 26 以上、引用、「登攀」96頁
- 27 「登攀」121頁
- 28 「登攀」95頁
- 29 「登攀」129～130頁
- 30 「登攀」127～128頁
- 31 「登攀」133頁
- 32 「登攀」92頁
- 33 1942年5月9日に徴兵制度実施計画が発表され、1944年4月に徴兵令が施行された。
- 34 以上、引用、「登攀」133～134頁
- 35 「登攀」137頁
- 36 崔載瑞「徴兵制実施の文化的意義」『国民文学』1942年5・6月号 5～7頁
- 37 香山光郎 (李光洙) 「内鮮一体随想録」『協和事業』第3巻第2号 中央協和会 1941年2月 15頁。